

青梅市文化財ニュース

第199号

平成16年5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859）

青 梅 市 を 讃 え る 歌

東京の奥座敷といわれる青梅市は、緑多き山、清流を集めて流れる多摩川など、四季折々の風情をもって、私たち市民を和ませてくれます。このような素晴らしい環境やその中での生活を讃へ、青梅市にも古くから、その地域やその家々で代々伝わってきた歌があります。それらは、五線紙や音符という意識はほとんど無く、また、書物によって残されていたわけでもなく、ただ、口から口へ、耳から耳へと伝えられて今日に至ってきたものが多いことでしょう。農作業中に口ずさむ歌や農業の収穫を願って歌われる歌、盆踊りなどの慰霊に関する歌や通年にわたって祝い事などに歌われる歌なども考えられます。また、記念行事に合わせて作曲され、以降、色々な催し事のたびに歌われる歌も存在します。このように、青梅市には民謡など数多くの歌が存在しますので、今回は、そのいくつかをご紹介します。

それらは、『粉挽唄』、『臼ひき唄』、『棒打唄』、『機織り唄』、『筏流し唄』、『奥多摩よささ節』、『大多摩節』、『御岳杣歌』、『吉野音頭』、『奥多摩音頭』、『奥多摩ながし』、『御岳音頭』、『根通り小唄』、『帯の長宿』、『青梅市民の歌』などが挙げられ、古来のものや、現代に作成されたものなどさまざまです。

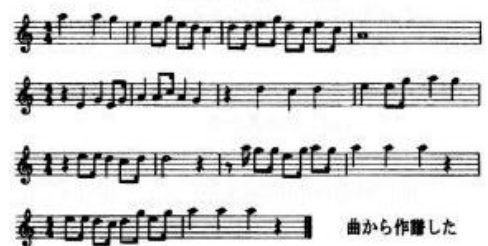
これらの中から今回は『御岳杣歌』と『青梅市民の歌』を具体的にご紹介いたします。

『御岳杣歌』

御岳杣歌は昭和29年(1954)川合玉堂が81歳の時に作詞を行い、古関裕而の作曲で、赤坂小梅、岡本敦郎の二人がレコーディングをした曲です。

- 1 ♪ お山御岳に たなびく雲は ハイノハイ
♪ 七代滝から 七代滝から 立つ狭霧 ソレ
♪ 多摩はよいとこ ヨイヨイヨイ
♪ 手拍子揃えて ヨイヨイヨイ(以下 繰り返し)
- 2 ♪ 霧の御坂の 太々神楽 ハイノハイ
♪ 天に通へと 天に通へと 鳴りひびく ソレ
- 3 ♪ 月の御岳の 夜は明けそめて ハイノハイ
♪ 日の出山から 日の出山から ほのぼのと ソレ
- 4 ♪ 多摩の山川 東京に近い ハイノハイ
♪ 川は呼ぶ呼ぶ 川は呼ぶ呼ぶ 山まねく ソレ
- 5 ♪ まねく仇波 流れて末は ハイノハイ
♪ 花の都の 花の都の 化粧の水 ソレ

御岳杣歌



以上が御岳杣歌5番目までの全歌詞です。曲としては単調で、大変覚えやすい曲であり、また、市内の名勝もあちらこちらに出てくるところが特徴的です。

市内御岳の玉堂美術館の入り口には昭和39年8月に作られた歌碑『御岳杣歌碑』が建てられ、

碑面には御岳杣歌の5番目の歌詞が記されています。

『青梅市民の歌』

青梅市民の歌という名前を意識してしまうと、なんとなくかたい感じになりますが、ある一つの歌詞のついた曲としてみると、とってもすばらしい曲です。

昭和36年11月11日市制施行10周年記念に制定されたもので、作詞・吉岡敬一郎、旋律・石井光、編曲・下総皖一の作です。混声四部合唱で歌われるこの曲の感じは、ゆっくりとした速さではあるものの、ずっしりとした荘厳な感じに歌われるよう、編曲がなされています。

歌詞は四番まで作られており、青梅の景色、市民の誇り、そして青梅市のこれからの益々の発展という願が込められた歌詞となっています。

この曲が制定された頃は、市のお知らせの際にはよく放送(短波)されていましたが、現在は、青梅市の公式行事の時などに歌われております。

- 1 ♪ 御岳のみどり さわやかに
ほほえむ朝に 窓あけて
ひかりを呼べば きょうもまた
青梅に生きる よろこびが
胸いっぱいにあふれくる
- 2 ♪ 昔を伝え いまもなお
調べはずむ おさ(箴)の音
新たにおこす 産業に
青梅の夢は はてしなく
希望はまちに もりあがる
- 3 ♪ 青葉をうつす 多摩の水
もえたつ秋の 山もみじ
四季おりおりに 観光の
青梅の誇り 限りなく
明るい力 みちわたる
- 4 ♪ あす咲く花も 清らかに
かおれよみのれ 自治のさと
ゆくては楽し はつらつと
青梅を築く ものわれら
ここに幸が わきあがる

これらの歌は時が過ぎるにつれ、知っている人が少なくなってきました。特に、古来の唄は音符や録音が無いところから、歌える人がいなくなれば歌も消滅してしまいます。このことから、譜面や、録音に残すことで、唄という分野での文化財的価値を維持することが迫られてきているように思います。

青梅市民の歌



(文責 鈴木 晴也)